

## ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』 イタリア語第一版（1912）への序文

氏 家 伸 一 訳

本書は自分自身で翻訳したかったのだが、二つの理由のため思いとどまらざるを得なかった。まず第一に、学問と教育の他のいろいろの仕事があり、翻訳のための時間が絶対的にとれなかったということである。さらに、既に別の言葉で言ったことを繰り返すのは、わずらわしい、それどころかうんざりする仕事のように思われたことも否定はしない。翻訳という仕事は、その本業が社会科学や経済の問題の研究であり、比較シンタックスではない著者自身には、甚だ耐え難い仕事、言ってみれば時間の無駄を意味する。だから、アルフレード・ポツレードロ博士という翻訳のエキスパートを見出せたことは非常に幸運なことであった。彼は、忍耐強く几帳面な人物であり、拙著にイタリア語の衣装を着せるといふ、決して易しくない仕事を引き受けてくれた。しかし、筆者は、良心のとがめもあり、同じく忍耐強く几帳面に出来上がった翻訳を再吟味した。やはり、いろんな意味で、ひとつの書物の作り直しというのは、見直しと書き加えの長期にわたる打解けた共同作業の成果であった。あちこちで、いくつかの新しい見解を追加し、いくつかは割愛した。原本の少なからざる頁が入れ替えられたり、変更されたりした。新しい小さな章も加わった。

その他の部分については、約束した様に、批判者の意見を活用した。たくさんの反対意見が出された。しかし、その批判に反比例して、賛同の方が多くなった。本書の著者のように、受験者がかくもその試験官に満足したことは希である。

学界で本書の受けた好評判は本当に私の内心での予想を大きく上まわるものであった。本書への最初の反響は、ドイツ語で書かれたという事実にもかかわ

らず、デモクラシーとその批判では老舗の国フランスで見出せた。本書は次いでオランダを経由してドイツで好評を博した。オランダでは誰よりも A. P. Leen Wenburg が、オランダ社会党の歴史の中から私の理論の証拠となるものをたっぷりと提示する一連の論文を発表していたし、<sup>①</sup>ドイツではデモクラシーがまだ未熟で周知もされていないとはいえ、やはり熱烈で盲目的な賛美者を擁していたのだが、ここでも広範な称賛を勝ちえた。極めて稀な幸運というべきだが、本書はいたるところで量的にも質的にも特筆すべき書評にしか出会わなかった。そのほとんどすべては本書を熟読玩味した末の書評であり、評者の多くは学界と政界で著名な人士であった。

ドイツ人ではグスターフ・シュモラー、<sup>②</sup>フリードリヒ・ナウマン、<sup>③</sup>コンラート・シュミット、<sup>④</sup>W. ハスバッハ、<sup>⑤</sup>パウル・カムプフマイアー、<sup>⑥</sup>J. ギースペルツ、<sup>⑦</sup>コンラート・ヘーニッシュ、<sup>⑧</sup>タルト・マルカルド、<sup>⑨</sup>オットー・ヴァルシャウアー、<sup>⑩</sup>ハンス・ドルンそしてアドルフ・ウェーバー、<sup>⑪</sup>フランス人ではルネ・ムニエ、<sup>⑫</sup>シャン・ボルドー、<sup>⑬</sup>ジョルジュ・ブロンデル、<sup>⑭</sup>M. ブルガン、<sup>⑮</sup>ダニエル・ヴァルノットウ、<sup>⑯</sup>アンリ・ヴォテール、<sup>⑰</sup>アメリカ人ではロバートC・ブルークス、<sup>⑱</sup>マルビオンW・スモール、<sup>⑲</sup>チェコスロバキア人ではG・マサリク、<sup>⑳</sup>スウェーデン人ではエフライム Efraim・リリエクイスト、<sup>㉑</sup>イタリア人ではアルトゥーロ Jehan de Johannis、<sup>㉒</sup>それに1911—1912年の冬にポーロニヤで行われた講演——まだ印刷されていない——でのアキッレ・ローリア。

まだある。本書はハイデルベルク大学における〈国家学学術協会〉の会議(1911年2月3日)の討論テキストに選ばれ、シカゴ大学の5年生(ほとんどすべては学士号取得者)を対象とする、社会哲学・社会科学の演習用基本図書に指定された(1911年夏)。

私に惜しみなく与えられた賛辞のすべてをここで紹介するのはやめよう。<sup>㉓</sup>いところの私の見解の独創性、政治の知識、上質の文体、輝かしい将来、これらすべての美辞麗句は根本的には他の著者に負う諸見解のせいであり、いわんや本書と再び結びつけられてはならないのだが——というのも本書は科学に奉仕するという本当につましい目的しかもっていないし、従って、高踏政治や娯楽文学で自慢しようとは考えないからだが——これらのすべてに対して何人かの有力な批評家が与えてくれた賛辞の数々も黙過しよう。

私にとって本質的な多くの主張に関して、評者たちは、どの学派や派閥に属

ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』イタリア語第一版（1912）への序文

していようと、一致していた。いわく、本書は社会学と政治学におけるすべての研究者の必読文献である。いわく、本書は曇り無き判断力、全くの客観性と公平さでもって書かれ、率直に、それどころか大胆に構想され物されている<sup>25</sup>。いわく、この著者が実際政治を熟知していることは明白であり、その知見から、分析的洞察力とあいまって、吟味にふされたテーマを扱う際の堅実な土台をなす総合的方法が生まれたのだ<sup>26</sup>。いわく、それどころか、本書は「好奇心の旺盛な精神の持ち主、生活を既述するという条件を充たさない限りどんな著作も値打ちは無いし、生き残ることもないということを忘れなかった炯眼の観察者<sup>27</sup>」の手によって書かれた。

しかしながら、他のなによりも喜んで指摘したいのは、もう一つ別の点に関して、評者の全員、あるいはほとんど全員が一致していたということである。すなわち、こういう言い方を許して頂きたいが、私の研究がまったく新しい科学を打ち立てたという批評である。この点に関しては評者のひとりアルトゥール Jehan de Johannis 教授の権威ある評価を引用させていただきたい。「この独創的で十分に考え抜かれた作品を表面的にのみ読む者には、部分的には既に自分の内面や普通の会話の中で表明されたような思想と省察を集めたにすぎないように思われるかも知れない。しかし、反対にミヘルスの本が提示した多くの多様で深遠な観察を吟味し整理し、均一性と統合的な意義を与えるのに必要な努力に思いをいたすなら、本著作が精力的な研究の所産であるのみならず、著者がはっきりと示している観察と直観の注目すべき才能の所産でもあるということに嫌でも気づかざるを得ない。」<sup>28</sup> 事実問題として、オストロゴルスキーの著作に言及されるわずかの場合を除けば<sup>29</sup>、私の無条件の独創性と素材の独自性は認められた<sup>30</sup>。特に本書で党員の心理学的分析や政治組織を構成する様々な分子の社会的分析、そしてそれに彼らが被る変容の分析が行われている部分についてそうである。要するに本書の第三部と第四部で考察された諸問題が確かに未開拓の分野を論じていることが正当にも認められたのである<sup>31</sup>。

多くの人私の研究を〈悲観主義的〉学問につかり過ぎていとみなした<sup>32</sup>。社会科学において楽観主義とは思い違いであるという理由で、そのことを褒める人がいないわけでもない。それを本書に含まれた事実認識の宿命的帰結と認めた人もいる。しかしこの点については厳しい批判もなされた。しばしば少々無邪気ところもあったが、一人のフランス人社会主義者は、私が白日の下にさ

らした諸傾向が確かにドイツ社会民主党には「非常に真実で顕著」であることでは同意したが、フランスのそれについては否定した。そこでは「オリガキーは二義的現象である」<sup>34</sup>と。アメリカの著名な社会学者で私の友人のブルークスは、躊躇うことなく、この論題に関する非常に説得力あるオストロゴルスキーの著作を一応おいておいて、混じりけの無いデモクラシーのモデルとして、又、彼によればあまりに率直な私の結論を再検討するためにも合衆国の政治生活をとりあげるよう指示してくれた。彼が私に気付かせようとしたのは、私の批判が〈ヨーロッパ〉のデモクラシーについては的を射ている、アメリカのデモクラシー（信頼に値する多くの著者が的確に表現したように〈ボス〉のデモクラシー）では全くの的はずれであろう、ということであった。これは個人でも民族でもしばしば見られることだが、他人の目にある藁を簡単に見分けながら、自分の目にある梁を認めるのに苦勞するという心理現象である。返答するのに手間はいるまい。

ただ同じブルークスの非難に対しては自己弁護せねばならない。彼のいうところによると、私は上の様に〈ヨーロッパの科学〉の轍を踏んでいるのである程度止むを得ないが、本書ではあまり過剰に「群衆に対する軽蔑」を表白する傾きを示している。全く根拠の無い非難である。大衆の自治能力を信じないといっても、大衆を軽蔑しているわけではない。即ち、大衆に同情を寄せ哀れと思ひ、飽かず彼らのために最大の利益になることを行う、ということである。もう一人別のアメリカ人スモールは書評の結論部分で私の指導理念にとまどいを表明している。しかしその際彼はそれはそれがデモクラシーに属するかそれとも貴族制に属すか理解していないし、あまつさえ私が教権的君主制の支持者ではないかと疑っている。というのもひとえに私があるところでハラ——評者のみるところによると〈お話にもならない〉ハラ——の一節を引用したからである。なんということだ。もしひとりの作家を引用しただけですぐにその追隨者のリストに〈列せられる〉なら、誰であれ公平な科学者はアナーキストの次には教権主義者、実証主義者の次には神秘主義者、ギリシャ人の次にはドイツ人と称せられねばなるまい。さらに読み方を知らない人のために言っておきたいが、私の共感はほとんど重要ではない、私の展開した主題と精査した事実とが結局充分ものをいうのである。しかもそれらは私がどの「学派」に属するかというような瑣末な問題ではなく、同じ素材に促されてどんな結論に私

ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』イタリア語第一版（1912）への序文  
がたどりついたかという問題について語るのである。

明らかに、このように潜在的に社会主義政党の基盤そのものに切りこむ著作はその党の懐の内部で、これに反論しようとする者に出会う。しかしながら私の予測とは反対に、拙著が社会主義者からも大変な敬意をもって迎えられたことを正直に言明せねばならない。確かに経済学者のコンラート・シュミットは私の集めた資料の豊富さと総括での「興味深く魅力的なやりかた」に敬意を表しながら、幹部を大衆の意思に忠実にしておくために、ドイツの社会主義政党は現在では十分な統制手段を所持していると考えている。他の人たち、その中には社会主義政党という特殊の視点からみても尚拙著の効用を完全に認めると表明し、労働者の政党の内部にはオリガーキーが存在すると明白に認めたマルクス主義者のコンラート・ヘーニッシュも含まれるのだが、彼らは私がデモクラシーの問題を余りに抽象的な仕方論じていると非難している。現在の社会主義政党の生に於けるデモクラシーの不足と欠陥は、究極の分析では、種々の階級の存在を基礎とする現代の社会情勢という一般条件、即ち、社会主義者自身決して回避できない条件で説明さるべきである、ということをもっと際出たせた方がよかったかも知れない。政党におけるオリガーキーを現在までの現実と認めはするが鉄則としては拒否する類の非難には既に余すところなく答えた<sup>35</sup>と信じている。

もう一人の社会主義者で改良主義の理論家パウル・カンフマイヤーは、拙著で展開された中心理念を無視することでしか自説をよく防衛できないと信じた。いわく、私のオリガーキーという概念はプロレタリア政治指導者の全員に対する弾効を内包している。（私自身は〈道徳〉問題を極力介入させないよう努力したのだが<sup>36</sup>）。また彼は同時に、私かデモクラシーを余りに高い理想の基準で判定したと非難したが、実際私は疑いもなく必然的に理想たらざるを得ないデモクラシーそのものを物差しにした。しかしそれは〈モダンな〉社会主義者のもう一つの「理想」とは相いれない。彼らは大衆の無能力と強力で安定した指導の必要性とを認めはするが、貴族制とはその本質ではなくニュアンスのみで区別されるそのような状態を頑固にもったいぶって「デモクラシー」の名で呼ぶのである。術語の問題であるが当然理が我々の側にあることは明白である。ただこのような状態に普通は実際問題として決着をつけることは決してできない。事実誰一人隣人が自分の気にいるように、8月の太陽が燦々と輝いて

いるところで薄明の話をしたり、犬を猫、猫を犬と呼ぶのを禁ずることはできない。

トリノ, 1912年5月      ロベルト・ミヘルス

注

- ① Cfr. *h.m.*, nel «Nieuwe Arnhemse Courant», XVII, n. 4633, 4639, 4645 e 4657.
- ② G. V. Schmoller, *Das erwachende Verstandnis für Arisbokratie und Bureaukratie in der radikalen land sozialistischen Literatur*, «Internationale Monatssch für Wissenschaft», VI, fasc. 1 (ottobre 1911); e, in altra forma, nel «Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft», XXXV, fasc. 4.
- ③ *DemokraHe und Herschaft*, in «Die Hilfe», 15 gennaio 1911.
- ④ «Sozialistische Monatshefte», 1912, fasc. 28, 29, 30.
- ⑤ «Zeitschrift für Sozialwissenschaft», Neue Folge, II, fasc. 11.
- ⑥ Paul Kampffmeyer, *Arbeiterdemokratie*, «Sozialistische Monatshefte», anno 1911, fasc. 18-20, pp. 1180 e ss. 同論文はファウスト・パリアーリによって次に再掲載されている。《Critica Sociale》, anno XXI, pp. 302 e 318.
- ⑦ «Zentralblatt der Christlichen Gewerkschaften Deutschlands», XI, n. 12, 13, 15, 17, 19.
- ⑧ «Bremer Bürgerzeitung», XXII, n. 171 (luglio 1911).
- ⑨ «Archiv für Rechts-und Wirtschaftsphilosophie», V, fasc. 1.
- ⑩ «Historische Zeitschrift», 108, 3. Folge, vol. XVIII.
- ⑪ «Der Stattsbürger», 1911, n. 23.
- ⑫ 彼の著作: *Der Kampf zwischen Kapital und Arbeit*, pp. 356 e s., Tubingen, Siebeck, 1910.
- ⑬ «Journal des Débats», 28 febbraio 1911, イタリア語では«Minerva», anno XXI, vol. XXXI, n. 14, オランダ語では«De Tijd», 11 Marzo 1911, e«De Nieuwe Courant», 8 marzo 1911.
- ⑭ «Revue Internationale de Sociologie», 19<sup>e</sup> année, n. 2, febbraio 1911, イタリア語では«Scientia», anno VI, 912, fasc. 2.
- ⑮ «La Réforme Sociale», vol. LXI, fasc. 18, e «Revue d'Économie Politique», v01. XXV, fasc. 4.
- ⑯ «Bulletin Mensuel de l'Institut Solvay», aprile 1911, n. 14, p. 221.
- ⑰ 同上. dicembre 1910, n. 10, p. 595.
- ⑱ «Revue d'Histoire des Doctrines Economiques», vol. IV, fasc. 3.
- ⑲ «Political Science Quarterly», vol. XXVI, n. 1. (mrzo 1911).
- ⑳ «American Journal of Sociology», fasc. del novembre 1911.
- ㉑ «Zeitschrift für Politik», vol. V, fasc. 3.
- ㉒ Efraim Liljeqvist. *Om de Otigakiska Tendenserna i den moderna Demokratiens Partiväsen*, «Det Nya Sverige», anno V, pp. 330-339.

- 23) <L'«Economista»>, XXXV111, n. 1926.
- 24) なかんずく、シュモラー、リリエクイストによる書評を参照。
- 25) Dorn, Hasbach, Bourdeau, Warschauer, Liljekvist. 更に筆者は、学問的批評が、私にとって極めて重要なもう一つの点でもどれほど私の立場を理解してくれたかに気づき、このうえない満足を感じている。実際誰一人私を「背教者」呼ばわりしなかった。（この点では次も参照。Schmoller, Kampfmeyer, Bourdeau）
- 26) Smal, Hasbach, Marcard, De Johannis, Warschauer.
- 27) Schmoller, Naumann, Bourdeau, Dorn, Bourquin, De Johannis. 逆に、私が「経済的事実を少々捨棄しすぎ」とか、「理論と具体的事実とを分離する例の社会学者を少々まねしすぎ」という非難に対してはこういわねばならない。それは解せない。たぶんそれは拙著をじっくり読まなかったからではないか、というのも本書が〈社会学〉について書かれた他のほとんどの書物に対して際立っているのは、それが社会生活の事実のみ依拠しているということに存するからである。
- 28) Vauters.
- 29) De Johannis, *Loc. cit.*
- 30) Bourdeau, Small. しかしながら、本書で展開された研究の先駆者をM, オストロゴルスキーの二巻本「民主主義と政党の組織」とみなすのは正しくない。先ず第一にこの卓越したポーランド人学者は観察の領域を制限し、確かに、高い経済性に相応しい忍耐と細心さでイギリスとアメリカ合衆国の政治生活を研究した。一方の私はあらゆる国、といっても当然のことながら、とりわけ多くの個人的経験が測定した国々、すなわちドイツ、フランス、イタリアのにおけるデモクラシーの歴史を基に、私の力説する諸傾向を立証しようと努力したからである。第二にオストロゴルスキーの目的はとりわけ民主的政府の作用の分析と歴史にあった。実際彼は政党の〈内部〉の政治にはわずかの章しかあてていない。それも、そこで作用している諸力の貧弱なイメージ以上のものを提示しているどころではないし、更に扱われたテーマについての病原学についてはその気配すら無いのである。第三に彼の本の、〈展望〉の性格をもつ結論を別にすれば、私が本書を書き上梓した時彼の著作、繰り返すが民主的体制における政党の研究にはいずれにしても不可欠のオストロゴルスキーの著作を直接には知らなかったからである。
- 31) Maunier, Marcard, e la «Kölnische Zeitung», 22 ottobre 1911.
- 32) Brooks, Warnotte.
- 33) Marcard, Vauters, Liljeqvist, Brooks, Small.
- 34) ボルドーの1911年3月2日付けの手紙より。
- 35) Cfr. pp. 421 e s.
- 36) 繰り返させていたいただきたいが、アメリカの労働運動に対するいくつかの評価と、1872年のイタリア・インターナショナルに関して言及した歴史的要素を別にすれば、本書の始めから終わりまで道徳的非難と解される言葉もしくはそう解しうる言葉、また誰であれ個人の名譽をわずかでも傷つけるような言葉は一つも無い。というのは、ひとつは、金銭上での腐敗は労働運動では稀な現象であり、従ってさほど重要ではない。また個人的問題ではなく客観的傾向を照射するのが私の意図だったからである。確かに私の批判がはっきりと「腐敗」という言葉を用いることもあるが、

それはただ日和見的理由から信念を放棄するという意味なのである。しかしその意味でさえ、本書の多くの文章から明らかのように私がリーダーの全員に対して非難を投げかけたというのは正確ではない。

### 訳者あとがき

本序文を翻訳した意図は以下の通りである。

- 1) ドイツ語初版への反響のほどを知ることが先ず第一である。というのも彼自身が、本序文で本書への書評を紹介しているからである。それらの書評をミヘルスはとうけとめていたか。『政党の社会学』の世界を理解するうえで、それは非常に有益であろう。
- 2) 『政党の社会学』が当時どう受け止められたかは、今世紀初頭の政治思想状況を知るうえで示唆的であろう。
- 3) 書評本体とミヘルス自身の反応とを比較検討することで、当時の彼の問題関心の焦点が分かる。彼が無視した批判も、ある意味で、その理解への手掛かりとなろう。

ミヘルス自身も驚いているように、本書への反響は大きく、かつ、好意的なものも多かった。勿論、「反対意見」も見出されたが、それは、ミヘルスと本書の評価が難しいこと関係している。

ミヘルスは民主主義か貴族主義者か、オリガーキーの鉄則は彼がいうほど普遍のか、オリガーキーはドイツ独自の現象ではないか、ミヘルスはリーダーシップを結局どう見ていたのか、肯定するのか否定するのか、ミヘルスは悲観主義者か否か、等々。

ブルークスがいうように、英米の政党への視点があれば、判断は異なっただろうか。(ちなみに、ミヘルスがアメリカの政治を全く無視しているわけではないことは、本書での言及でも分かる。例えば、92頁では、ゾンバルトを援用して、米国民は「もっとも広範囲で、際立った民主主義を享受している」と書いている。)

ミヘルスはリアリスト研究者を自認しているが、理想主義者ではないだろうか。キャンプマイヤーは、ミヘルスの研究には、「倫理的なイメージが存在する」と述べている。ナウマンは逆に、ミヘルスを幻滅した理想主義者と呼んだ。

ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』イタリア語第一版（1912）への序文

ミヘルスの本書は、新たな問題をも触発した。もし、労働者の民主主義を求めるなら、党内民主主義以上に産業組織の民主主義を求めるべきではないか。民主主義は、経済的民主主義と無関係の独立した問題として取り組むべきだろうか。

政党のオリガーキー傾向は、ドイツの社会民主党 SPD にのみ固有のものか、という疑問は幾人かの評者が、もっていた。ミヘルスは向きになって反論するが、そもそも、政党も含めた政治現象を、すべて国民性に換言するのは方法的に一面的だが、それを頭から否定するのも逆の非現実的という偏頗に陥る。後の政党研究者が、語っている。

「政党は政治現象の主要な形成要因である。政党が自らの属する政治機構全体の中で考察されなければならないのは、まさにこのよう理由によるのである。すなわち、歴史的諸事情、制度的伝統及び民族的特性をすべて背景として考察するときにおいてのみ、種々ことなる政党形態の特殊的性格、争点及び貢献が十分評価されるのだ。」（ジグマンド・ノイマン編『政党——比較政治学的研究 I』渡辺一訳、1958年、5頁。）

『政党の社会学』のもたらした反響について、グルクスは述べている。

それは、ベルンシュタインが前世紀末に、SPD 内にもたらした騒動と同じものを、もたらした。しかも、「一層性質の悪い騒動」を。ベルンシュタインが党主流派の経済政策に対し批判を加えたのに対し、ミヘルスは、党の「組織とリーダーシップ」を攻撃したからである、と。

SPD サイドからの反論は、修正主義者のキャンプマイヤーから出てきた。

マルクスの「リアリスティックな思考方法」は、「リーダー無き民主主義というユートピア」とは対立するとし、マルクスは、経済世界での「指導」の必要性を導きだした、とした。例の、オーケストラと指揮者による説明である。

そして、加えて、ミヘルスに反論する。ミヘルスのオリガーキー論の基礎には、社会主義に関する、ある種の「理想主義」が存在する。そのイメージとは、「経験」より、「思索」の作品である。それは、社会主義革命的で、反代表制的な起源から由来する。

キャンプマイヤーは、SPD における民主主義の不足は認めながら。その原因を「オリガーキー的リーダーシップ」には求めない。キャンプマイヤーの、

組織内「権力」問題への関心は希薄なようである。逆に、リーダーの権力を当然とする。その点は、キャンプマイヤーも認識しており、こう言っている。ミヘルスは、「代表制」どころか、一切の「支配体制」を否定する、と。そうとするなら、1911年時点のミヘルスには、深いところでアナーキズム（アナルコ・サンディカリズム）のモメントが残っているということか。

マルカルドは、決して、ミヘルスはユートピアンではないとする。さらに、初めて、「支配の問題」を「国家形態の問題」から切り離し、独自のものとして論じた功績さえ認めている。「演繹」的方法ではなく、「分析」的方法を執るとして、さきのキャンプマイヤーとは反対の評価を下す。

マラカルドによると、ミヘルスは、オリガーキーの危険性に対抗するような方策すら提起したという。もっとも、それは実施されなかったが。（後述するように、マサリクもそれを指摘している。）しかし、マラカルドもまた、労働者の解放運動における民主主義の「幻想」を説いたミヘルスは、やはりペシミストである、と結論している。仏のアンリ・ヴォテールも、ミヘルスの「生き生きとした観察」のうちには「ペシミストの考察」があるとのべている。

ミヘルス自身十分認識していたし、所々で言明していたところだが、階級支配と民主主義とはどういう関係にあるか。この問題は、マルクス主義者には致命的にもなりうる問題であった。K・ヘーニッシュは、今日の民主主義の不十分さの「究極原因が、階級社会という一般的条件の中にある」ということを力説した。ミヘルス自身もそのことは十分自覚していた。しかし、ミヘルスにとってはまさに、その先こそ難問がある。ヘーニッシュは、いわゆるマルクス主義の基本を述べているだけで、ミヘルスと現代大衆政治特有の問題を全く見落としている、とあって過言ではない。「社会学」は、反唯物論的とはしばしば言われることだが、『政党の社会学』の分析は、階級支配とは別次元での新しい次元での問題を扱ったのだ、といえる。

とはいえ、ヘーニッシュも階級支配の廃棄がすべてに優先するとまでは、いわない。社会主義と民主主義の関係に関する、ウイルヘルム・リープクネヒトの言葉を引用しているところからもうかがえる。「民主主義無しの社会主義はインチキ社会主義である。しかし、逆に、社会主義無き民主主義もインチキ民主主義である。」

ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』イタリア語第一版（1912）への序文

このリープクネヒトの言葉は、いみじくも、全く新しい、今日の問題を提起する。つまり、先にも触れたように、民主主義とは政治的であるのみなのか、経済的民主主義とは考えられないのか、階級支配の問題は、経済的・社会的世界での民主主義なしに、政治的民主主義はありうるのか、という問いを提起する。

本書は「全く新しい科学を打ち立てた」という、一致した評価に、ミヘルス自身も自画自賛するように触れているが、これとの関連では、オストロゴルスキーの研究がすぐに問題となることはいうまでもない。ただ二人の視点の相違については予め指摘すべきだろう。ミヘルスはあくまでも、党内民主主義に焦点を当てていた。オストロゴルスキーにおいては、ミヘルス自身も言うとおり、国内政治における政党の組織的変容の影響という問題が中心であった。

「無条件の独創性と優先性」についても、衆目の一致するところであろう。ミヘルスは、第Ⅲと第Ⅳ部に自信をもっている。党員の心理的と社会的分析の部分である。これはたしかに、オストロゴルスキーにはみられない研究であるといえる。

第二に、先に述べたように、政党「内部」の構造、組織問題こそ本書の真骨頂といえよう。さらに、政党の「病原学」こそ、自書の特徴であるとミヘルスは述べている。民主的と自称する政党がオリガーキーという病気に侵されていくという意味での問題意識の特異性は指摘できる。

オストロゴルスキーが英米の政党政治の歴史的既述に専心したとすれば、ミヘルスは、大陸、なかんずく、SPDの内部組織を調査研究対象とした。ミヘルス自身は、オストロゴルスキーの研究の詳細は知らなかったと語っているが、リップセットは、ミヘルスよりもっと強い関心をオストロゴルスキーに抱いたマックス・ウェーバーを通して、ミヘルスにオストロゴルスキーの影響が及んだと推論している。ミヘルスが『政党の社会学』で取り上げたテーマの数々は、すでに、オストロゴルスキーが展開したものであった、という。すなわち、「労働運動における組織されたエリートと支持者大衆の関係、・・・党によって又党のために生きる職業政治家、・・・支持者にとって党が自己目的となる普遍的傾向、その結果として、SPDの職員が急進的コースに反対するような傾向、

・ ・ ・ 党の保守的な戦術に対する労組の関心。」端的にいうなら、要するにオストロゴルスキーは、ミヘルスよりも何年も前に、民主主義における、一種の、オリガーキー鉄則を定式化した、とさえ主張する者もあった。(Introduction, by S. M. Lipset, in R. Michels “Political Parties — A Sociological Study of the Oligarchical Tendencies of Modern Democracy”, 1962, p. XIII-XIV.) ドイツ人政治家ナウマンも、書評のなかで、民主主義とオリガーキーに関するテーマは、自著（『民主主義と帝政』）ですでに詳述した、と語っている。

先にのべたように、こういう本書の独自性の問題以上に重要なのは、実は、本書が読者に与えた著者の思想に関する印象である。つまり、数人の評者が使った言葉でいえば、「悲観主義者」ミヘルスというテーマである。これには、本人自身も数言を費やして述べている。たしかに、書評には、ミヘルスの悲観主義にふれるものがいくつかあった。

オリガーキーはSPD特有の現象であり、フランスには当てはまらない、とのフランスの社会主義者の評と、アメリカにはありえないとミヘルスの鉄則を批判するものである。

これに対する反批判は、そっけないもので、批判になっていない。真摯な研究者なら、具体的に、実証的に反証すべきだった。もっとも、本書には、英米の政党政治にふれた箇所もいくつかあったことを、付言しておこう。

以上のフランスとアメリカの側からのミヘルス評は、しかし、悲観主義とは余り関係していない。

ちなみに、オリガーキー傾向に相応しい環境がとりわけドイツで顕著だという指摘は本書の処々で見られる。(たとえば S, 93) また、とりわけドイツ人は強い指導者願望を有し、それは、「従って、心理学的にみて、強力な指導層の成立の、もっとも実り多い沃土」なのだ、とも書かれている。(S. 54)

アメリカ人スモールの批評にはもう一つ興味深い指摘がある。ミヘルスはハラ一流の教権主義者ではないか、との疑いを述べている。これに、ミヘルスは立腹まじりに、いいがかりだと、反駁している。しかし、その反論は、はからずも、彼の引用作法における一貫性の無さを浮き彫りにしている。すなわち、恣意的な牽強附会に近いものが見られるからである。引用対象の思想とは無関

ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』イタリア語第一版（1912）への序文  
係の脈絡での、恣意的な引用はまさに、読者を戸惑わせるからである。

二人の社会主義者の書評に対する反論もおもしろい。ふたりとも、いわば、  
現実の立場から、ミヘルスの民主主義概念は抽象的過ぎるとか、「高い理想」  
とか批判している。改良主義者カンプフマイヤーが民主主義というものは、貴  
族制ことであるとのミヘルスの反批判は、本書の主張の中核と関係していた。

最後にマサリクの書評を取り上げたい。マサリク（1850-1937）は、第一次  
大戦後の初代のチェコスロバキア大統領を勤めた。それ以前は大学で哲学を教  
えていたインテリで、反カトリックと反マルスクス主義を基本的立場とした、  
といわれる。彼も経済活動での民主主義の問題、にふれている。

マサリクは、ミヘルスとサンディカリズム理論家ラガルデルの著作を並べて  
批評している。元革命的サンディカリストのミヘルスとしては皮肉なめぐりあ  
わせというべきだろうか。サンディカリズムの反議会政治、反政党思想はフラ  
ンス特有の事情から生れたとはいえ、当時の思想界にはよく知れ渡っていたし、  
広範囲に関心を呼び起こしていた。

マサリクは革命的サンディカリズムの立場をこう要約する。

「ラガルデルは、議会における多数決原理を非難する。というのも、まさに  
それによってこそ、政治の不安定が通例となるから。最後に彼は、代表者の支  
配を論難する。というのも、彼は、大衆の直接支配を追及するから。」

しかし、マサリクは、オリガーキーの鉄則を唱えたミヘルスをそれに対決さ  
せる。マサリクによると、ミヘルスは、労働者出身のリーダーよりも、ブルジョ  
ア出身のリーダーの方を高く評価している。

『政党の社会学』独語第二版（1925）でミヘルス自身が、「正しい」と評価  
したマサリクのミヘルス評は紹介に値する。マサリクは、本書を深く読み込ん  
でおり、そこでミヘルスが語っている、反オリガーキーの諸契機を見逃さなかつ  
た。真の、革命的な新しいリーダーを民主主義自体が生み出すこと、そして、  
社会教育の重要性に関する記述である。もっとも、それらについては、ミヘル  
ス自身は「幻滅した」ペシミストになったとしつつも、こう結論している。ミ  
ヘルスの考えでは、貴族制と比べれば、いくら欠陥があろうとも民主主義のほ  
うが「まだましである」、と。そして、マサリクはこう述べる。「私が彼の立脚  
点を挙示するのは、彼の〈修正主義〉が、政治的保守主義の利益というものの

ために、食い物にされないよう（悪用されないよう）にするためだ。それは、相手のまじめな自己批判を、己の弱点のために悪用するのと、かわらない、まちがいである。ミヘルスの本は民主主義を弱めるどころか、それを強めるのだ。」ミヘルスはしばしば、保守主義的エリート論者に数えられ、保守主義的に動員されるが、マサリクはそれを、悪用と断じている。このマサリク最後の表現について、ミヘルスは、14年後にこう述べている。「この本は民主主義への信念を弱めるどころか強めるものであるという確信に達したとする、正しいとしてよい。」（現代思想8『政党政治の社会学』ロベルト・ミヘルス著、広瀬英彦訳、ダイヤモンド社、1975、X頁。）

（ちなみに、新たに加えられた小さな章とは、第一部B、第六章「大衆の二次的特性」である。これは、第二版では、削除された。）